

病気が篤くなり入院されたというお話を野辺山におりましたときにお伺いしました。その後、一進一退を続けられる様子を時折うかがいながら一日も早いご回復を念じておりました。

Solar-A の打ち上げと、電波ヘリオグラフの完成が目前に迫ったこの時期に先生を失うことはまことに残念であり、日本の天文学にとっても大きな損失であります。今はただ、先生のご遺志を継ぎ、これらの仕事を完成させることが残された者の責務と思います。私どもは先生に続いて日本の太陽物理学とそして天文学をますます発展させるよう努力することをお誓いいたします。

甲斐敬造先生との告別の時にあたり、日本天文学会を代表してここに謹みてご冥福をお祈りいたします。先生どうか安らかにお眠り下さい。

1991年3月14日

社団法人日本天文学会理事長

小暮 智一

### 哀悼： 甲斐敬造先生

いきなり私ごとで恐縮であるが、昨年6月、父を亡くした。後始末のあと、COSPAR 出席、イギリスをまわって帰国したとたん、甲斐先生の異変が起こっていることを知るはめになった。

本年3月14日、9時すぎより降り出した雨は本当に冷たかった。だれかが「なみだ雨だなあ」とつぶやく。通夜の席で涙をふいていた森本さんが、とぎれとぎれに甲斐さんの病死を報告している。古在さん(葬儀委員長)らの甲辞が終わり、読経のなかで焼香の列がつづく。喪主をつとめる奥さん、長男の博幸君、長女のいづみさん(いづちゃん)に目を向けるのがつらい。隣の席にすわる海部さんがとうとうハンカチを取り出した。いづちゃんの幼稚園のころの顔がふと思い出され、もう涙を押さえることができない。

大学院の学生だった私が甲斐さんの指導を受け始めた1974年、甲斐さんは2度目のオーストラリア留学から帰国したばかりで、若くバイタリティいっぱいだった。「ここでは研究のまえにまず生活確保だよ」、愚痴とも本音ともつかぬ言葉を口にしながら、甲斐さんは野辺山太陽電波観測所員の先頭だった。「いづみが生まれるときは大変だったよ」。弘法坂も旧道でガタガタ。野辺山駅で女房を電車に乗せ、甲斐大泉駅に車で先まわりして蕪崎病院に通った。だから甲斐いづみなんだ、職員住宅のまえの道路を雪かきしながら、甲斐さんはそんな話をした。雪が積もれば雪かきで半日、昼になる頃



1975年10月1日、金峰山頂にて

には疲れてビール。そして昼飯中にまた雪が激しくふると午後雪かき。

オーストラリアでカルグーラ太陽電波望遠鏡をもちいたの観測で大きな仕事をしてこられた甲斐さんにとって、野辺山の160 MHz 干渉計はけっして満足できる装置ではなかった。「ほとんど同じ観測目的なのに、こちらは2次元、こちらは1次元、分解能もほぼ同じ、しかもこちらが遅れてできるのではね」、そう言いつつもカルグーラに残るようにとの話を振り切って野辺山に赴任されたのには、やはり心に期すものがあつたからだと思っている。不利な装置だとわかっていてもメンテナンス、観測に手を抜くことが一切なかったのも、いかにも甲斐さんらしかった。「ここで成果をあげることが、太陽電波だけでなく、天文台の次の計画の成否に直結するんでねえ」、甲斐さんはそう言って、みずから故障したアンテナによじのぼった。冬場のアンテナ修理は手が鉄骨に凍りつきそうになる。ジブのなかで暖をとり、突撃である。甲斐さんは痔をわずらってしまった。「ぼくは次男(痔難)ではないんだけどねえ」

特色のある装置をつくりたい、世界に通用する装置を持ちたい、私たちは装置づくりを続けてきた。音響光学型スペクトル計を日本の電波天文に持ち込み、さらにオプト干渉計の実験をすすめた。17 GHz 干渉計には1秒以下の高い時間分解能という特色を持たせた。80 GHz のミリ波で新しい工夫を導入したフレア観測装置をつくった。いずれも限られた科研費などの枠内の仕事であり、生活費からの持ち出し、手作りを余儀なくされたが、労をいとわない甲斐さんの姿がいつも私たちの中心にあった。

宇宙電波観測所を野辺山に開設するさいの地元や関係諸方面との折衝、名古屋大学空電研究所の太陽電波部門

と合同で『電波ヘリオグラフ』計画をぶちあげた際に東京天文台内で小さな研究分野のリーダーとして甲斐さんがしよった重荷、私たちが甲斐さんと一緒に背負うべき重荷を、ほとんどひとりでかかえてしまった甲斐さん。そんななかでも「ひとりに続く第2号太陽フレア観測衛星を実現して、電波ヘリオグラフとのタイアップで太陽フレアの粒子加速機構を解明するんだ」と、身を粉にしてふたつながらの実現のために走りまわった甲斐さん。けっして得意ではなかった政治的・行政的なことがらにも正面からぶつかっていった。

1986年夏に私がNASAより帰国した際、いま思えば、すでに甲斐さんの病気は始まっていたのではなからうか。「顔色がすぐれずおかしいわ」と家内に注意されたことを覚えている。88年、喘息症状が発現。89年正月より同治療開始。90年6月、右手末端神経の知覚・運動麻痺、8月2日、麻痺が両手両足に拡大。同月6日、東京医科歯科大学病院の神経内科に入院し、『アレルギー性肉芽腫性血管炎』と診断する。非常に稀な病気で根本的治療法は未確立、いちおう病気を押さえ込めても、再発の可能性が高く、その場合きわめて危険との宣告。奇病とのことで若い医局員らの研究対象となる。「僕はモルモットにされちゃったよ」

闘病生活はまさしく苦闘であった。容態が安定し、11月には清瀬病院リハビリ科に移った。リハビリで腰をいため、胃潰瘍に苦しみつつも、学者として自己の病気を冷静に観察し、主治医に正確な情報を要求し、野辺山の現状を心配しておられた。「医者とは安静にと言うけど、リハビリを続けなくちゃ。リハビリの医者は僕の病気のことなど分かっちゃいない」。車いすに座り、リハビリを兼ねてワープロをたたいていた。

本年2月9日、急激な病状悪化。武蔵野市の日赤病院ICUに救急車で運ばれる。もっともおそれていた言葉＝『再発』という診断が出る。22日一般病室へ。翌23日、面会した。「こんどはダメかと思ったよ」と苦笑いされた甲斐さん。とたんに厳しい顔つきで「小杉君、本当のところ僕はこれからどうなるんだろう」と問い質してきた甲斐さん。ごめんなさい、でませを言うしかなかったのです。3月7日、再度ICUへ。11日午後7時ちょうど呼吸不全・心不全で永眠。翌12日、同じ病気で苦しむ方々のために、病理解剖する。甲斐さん、最後まで学術論文に名を残しますね。私も3月10日に甲斐さんが共著者の「SOLAR-A衛星の硬X線望遠鏡」という論文を投稿したところでした。

1975年よりご家族を八王子に移され単身赴任を続けてこられた甲斐さん、あなたをご家族のもとにお返しします。奥さん、長いあいだ申しわけありませんでした。

略歴および研究歴

- 昭和34年 東京大学大学院修士終了
- 同年 東京学芸大学助手
- 40年 東京天文台助手
- 同年 「太陽電波IV型バーストの研究」により理学博士
- 42～43年 オーストラリア電波物理研究所（シドニー）滞在
- 46年 東京天文台助教授
- 47～48年 オーストラリア電波物理研究所（シドニー）滞在
- 56年 東京天文台教授
- 57年 野辺山太陽電波観測所長

電波・X線などの新しい手法を使っての太陽フレア研究で世界的な研究成果をあげた。最近では、新しい太陽電波望遠鏡＝電波ヘリオグラフ（90～91年度建設中）、太陽X線観測衛星 SOLAR-A（本年8月打ち上げ予定）の実現に指導的役割を果たしていた。著書に「電波で見た太陽」（出光書店、1976年）、「太陽のドラマ」（岩波書店、1980年）などがある。

## ASTRO Observatory Domes

**天文台の建設は青少年の  
未来の心をはぐくみます**

文部省宇宙科学研究所  
6mドーム(コンピュータ  
コントロールシステム)



◆主な天体観測ドーム納入先◆

文部省宇宙科学研究所／東京大学教養学部／宮崎大学教育学部／東京学芸大学／埼玉大学／福島大学／川崎市青少年科学館／杉並区立科学教育センター／駿台学園一心荘(北軽井沢)／防衛大学校／東海大学宇宙情報センター(熊本)／栃木県こども総合科学館／日原文天文台(島根)／自然科学館星の家(新潟)等の他全国に数多くの実績があります。

**ASTRO 光学工業株式会社**

〒170 東京都豊島区池袋本町2-38-15 ☎03(985)1321